

研修期間：令和7年6月4日～6月14日

所属：名城大学薬学部薬学科

学年：6年

学籍番号：210973227

氏名：小西 友紀乃

## 1. 参加目的

今までの講義で学んだことや日本とアメリカの違いを見て学び、これからの実習で活かせることや今後どのように日本でも医療体制が変わっていくか参考にすることができる。また、海外の方が増える中で、国ごとに違う医療体制を理解することで、日本でもより良い寄り添った医療を提供することができる。

## 2. 研修内容

### 【研修テーマ】

日本との職能や医療制度による考慮の違いを学ぶ

### 【研修目的】

月日	研修内容
6月5日	オリエンテーション、大学内の見学 講義：アメリカの薬学教育、卒業後の進路や資格取得、保険制度について
6月6日	講義：個人薬局の薬剤師の役割について 個人薬局の見学：テクニシャンとの分担、薬局ごとの一包化の技術の違い
6月7日	バーミンガムの鉄鋼業の歴史、黒人差別があった時代の野球場の見学、野球観戦における日本との違い
6月8日	プロテスタントのバプティスト教会での礼拝 様々なショッピングモールの違い
6月9日	講義：病院薬剤師の役割について、中小病院見学：薬剤室、普通病室、MICU シミュレーション施設の見学、無菌調剤室の見学
6月10日	講義：外来診療における薬剤師の役割、退役軍人の病院における外来診療との資格の違い、高齢者への医療に関して薬剤師として考慮すること
6月11日	リハビリ病院の見学、輸液専門薬局の見学、大病院の見学 それぞれの薬剤師の役割
6月12日	大学での企業化研究、大学での研究紹介、研究施設の見学、 研究発表の視聴、アルツハイマー型ハエによる体験実験

### 【研修内容の詳細】

初日の講義では、薬学生になるまでの経緯を教わり、2年の専門科目を卒業した後に、薬学部に入學し、3年または4年のいずれかのコースで卒業する。IPPE という制度で1,2年時に臨床実習として調剤薬局や病院に夏季休暇中に行き、4年時は5週間ずつ希望を出して8施設に実務実習に参加するAPPE という制度がある。また、サムフォードではOSCEを毎年様々な項目で行い、4年の実習前にスーパーOSCEで総まとめを行う。動態の計算や副作用の指摘などより難易度な印象を受けた。そのため、在宅、外来、入院など複数の条件のシミュレーションの部屋が常備され、リアリティーを

重視していた。OSCE の俳優が学生とすれ違わないように、別通路まで準備されており、学生にできるだけいい授業をしたい姿勢がみられた。さらに、アメリカでは研究が義務化されておらず、1、2年の選択授業で研究を選んだり、夏季休暇中にバイトとして研究したり、4年時の実務実習の一つとして、研究を選択することができる。卒業後は多くの薬学生がレジデント制度を通して病院に就活するが採用率は30%ととても低く、競争率の高さを感じた。3つの薬局の見学に行かせてもらった。1つ目は、普通の薬局で電子処方箋が送られることや患者がリフィルをもらいに来て、準備した薬を手渡しやドライブスルーで受け渡す。薬局に簡易検査室があり、血圧、血糖、コレステロールなどを測れる。その検査を基にフォローアップなどが行われる。薬はPTPではなく、大きめのボトルに入っており、別のボトルに入れ替えられる。2つ目の薬局は通常薬局の業務に加えて、在宅を強みにし、一包化の機械が進んでいた。1か月分の薬を準備し、ドライバーに届けてもらい、途中で処方変更があった場合、家まで行き薬を抜くことがあるそうだ。輸液調整専門薬局は病院のCT検査や在宅に必要な輸液を調整し、届ける薬局である。今回見学に行ったのは小児用の輸液薬局だったため、製品化された薬を1回分のポンプなどに入れ替え、1週間分準備する。病院は中小と大病院の両方を見学でき、病室やICU患者がいるところも見せてもらった。梗塞や手術後の患者が2週間入院するリハビリ病院も行き、薬剤師がモニタリングや地域薬局への繋ぎをする。薬剤師の種類によっては、診察後薬を受け取る前に病院患者に指導やフォローアップを行い、専門の分野において自分で処方箋を書いたり、検査を出したり、1つの資格で全州どこでも指導できる薬剤師がいる。退役兵への尊重があり、銃弾傷やトラウマにも対応する退役兵専用病院があり、日本にはない考えだった。

#### 感想

今回は薬剤師が活躍している様々な施設への見学をさせてもらったが、テクニシャンとの分業に最も驚いた。日本でもテクニシャンはピッキングが可能だが、アメリカでは無菌調剤や点滴の調整、抗がん剤の調整も可能である。これは病院だけでなく、薬局においても、薬局のリフィル処方でもテクニシャンが可能である。その代わりに、薬剤師は処方箋の監査、ピッキングや調剤されたものの最終監査がメインの仕事となり、薬局では患者との時間に割くことができる。それにあたって、多くのものが機械化や電子化が発展している印象だった。例えば、輸液調剤の薬局では、クリーンベンチにどのルートにどの薬を設置するか教え、薬とルートをバーコードで照合し、随時輸液バッグの重さをはかることで、誤った薬を入れたり、量が十分入ってなかったりするとすぐ感知し、周知してくれる。このように機械化にすることで、誰でもできる作業となる。他にも驚いた違いは、病院薬剤師の使用しているアプリだった。私用の携帯にいつでも薬歴、治療歴、検査結果、プログレスノートを読んだり、書いたりでき、遠出をしても患者の状態をいつでも把握できるため、検査の申請やアプリ内のチャットで医者に薬剤変更の提案、報告を送ることも可能である。また、様々な病院でも同じアプリを使用しているため、別の病院にかかっても、その情報が共有されるため、相互作用や重複を確認しやすい。病院にもかかりつけ薬剤師がいるような状況に似ているように思った。様々なところに見学に行かせてもらったが事前に講義をしてもらえたことで、紙面で理解した内容を実際に現場で確認することができて理解の向上につながった。質問を思いつきやすくなり、見学後でも先生に質問もできたことがより良い体験につながった。どの先生も歓迎的で、私生活も紹介してくれたため、教会に連れて行ってもらえたり、夜ご飯を家族と共に来てくださったりで、休日もとても充実したものを過ごせた。どの先生もより良い講義を、体験をするために、常に私たち目線でいろんなことを準備していただき、日本にも興味を持っていただいき、逆に質問を投げられることもあった。これから日本にも導入されるものもあり、一步先に少し未来を見た気がした。